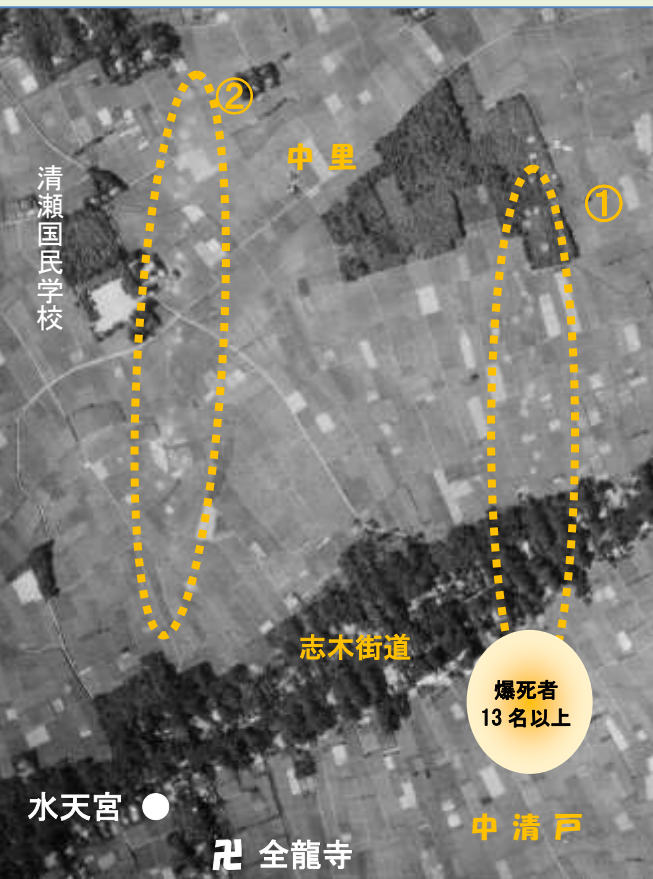


空中写真に見る着弾痕跡

下の空中写真は、戦後間もない頃にアメリカ軍が撮影したものです。黄色の点線で囲んだ①②の中に見える白い斑点は、爆撃による着弾痕とみられています。

いく筋かの着弾痕が見られますが、戦前から清瀬に住んでいる人の証言や、日誌・日記などの記録と照合して、確かなものだけを紹介します。



国土地理院発行「空中写真画像データ」
(1947年7月24日 米軍撮影 USA-M379-No2-158)

清瀬空襲 … 犠牲者は18人以上

1945(昭和20)年4月2日早暁、清瀬が空襲され、下宿(地図A)で住民3人、中清戸(地図B)で住民13人と疎開してきた1人が爆死しました。どちらも犠牲者は女と子どもばかりでした。

清瀬病院も被弾して、入院患者2人が亡くなり、看護婦1人が負傷しました。

清瀬空襲時の不発弾処理

戦後になって、空襲時の不発弾が数多く処理されました。”町報きよせ””市報きよせ”などの記録によれば、1966年5月から7月にかけて下宿で12発が処理され、1971年には台田団地の宅地造成工事現場で、見つかった不発弾3発のうち1発が爆発して、住民に負傷者や建物の被害が出ました。同じ年の5月25日にも台田団地造成地の近くで不発弾の処理を行っています。戦後50年にあたる1995年にも下宿で不発弾処理がおこなわれました。

「1945(昭和20)年の清瀬を歩く」清瀬の戦時遺跡マップ①

清瀬市北東部(中里・上清戸・中清戸・下清戸・下宿)～農村地帯と生活の三清戸～※上清戸・中清戸・下清戸を合わせて三清戸と呼んだ



清瀬村

アジア太平洋戦争の末期、清瀬は人口が8,000人ほどの小さな村でした。

【線路の北側は生活の場】

今の西武池袋線の北側が農村地帯で、村役場(現市役所)や郵便局(現上清戸一丁目)がありましたが、公立小学校は清瀬国民学校だけでした。

下清戸の南東部から隣接する新座市西堀にかけては旧海軍の大和田通信所(現米軍通信基地)で、中清戸の神山公園の辺りにも通信施設がありました。

【線路の南側は結核の療養地帯】

線路の南側の、松山・竹丘・梅園は当時「芝山」とよばれ、住民は少なく東京府立清瀬病院、民間のベトレーム療養所、軍関係の傷痍軍人東京療養所、広大な敷地を持つ結核療養施設などがありました。

戦時中の村人の生活

村人の多くは農業に従事していましたが、松の根を掘り出す仕事や、飛行機の掩体壕(えんたいごう)づくりなどの勤勞奉仕にかり出されました。松根油の製造設備(地図★)が、今の上清戸一丁目(旧吉川青果市場があった場所)に置かれていました。

また、今の中清戸四丁目アパートの近くには、陸軍の探照灯(サーチライト)隊とその電源を供給する発電装置が配備されていました。

灯火管制で薄暗い中を、警報が鳴るたびに防空壕へ逃げ込む日々が続いて、安心して生活できませんでした。

学童疎開の受け入れ

1944(昭和19)年の夏、戦争が激しくなると、東京都心の赤坂区(現在の港区)から青山国民学校の児童79人が、親元を離れて集団で疎開してきて、下宿の円通寺・下清戸の長命寺・中清戸の全龍寺の3つのお寺に分かれてくらししました。

物資の足りない時代のこと、学童疎開児が使うものらしい机や椅子を、高等科(今の中学2年生)の男子生徒たちが、国分寺駅からリヤカーにのせて半日がかりで清瀬国民学校まで運んできました。

1945年3月の初めに、卒業式を前に6年生が円通寺から都心の学校に帰りましたが、この人たちは数日後に東京大空襲に見舞われたのでした。

代わって同じ青山国民学校の3年生女子22名が3月の下旬に円通寺に疎開してきました。